

# ゾルゲ事件とは?

1941年10月、国際的な情報諜報団検挙事件として、リヒャルト・ゾルゲ、尾崎秀実らが逮捕されたのが、いわゆるゾルゲ事件である。

ソ連共産党中央委員会および赤軍第四本部に直属して諜報活動に従事していたゾルゲは、ナチス党員の肩書きとともにドイツの新聞記者を装って来日、東京の駐日ドイツ大使館などで情報を収集していた。当時、近衛文磨内閣のブレーンの一人であり満鉄の嘱託だった尾崎秀実からも情報を得たゾルゲは、対ソ戦での日本の方針や、ナチス=ドイツのソ連攻撃情報を収集・分析してソ連共産党最高指導部に報告していた。

ソビエト政府への情報漏洩は実に8年にもおよぶ。ゾルゲ諜報団は、各国からのコミンテルン・メンバーに加え、国際共産主義運動の実現をめざす日本人活動家たちによって組織されていた。その中でもゾルゲが最も厚い信頼を寄せていたのが尾崎秀実である。近衛内閣嘱託の立場を利用して、決死の覚悟で尾崎は国家機密をゾルゲに提供した。報告された主な内容は、日独防共協定、大本営設置事情、ノモンハン事件、日独伊軍事同盟をめぐる問題、さらには最高国家機密である御前会議の内容にまでおよぶ。



リヒャルト・ゾルゲ

1939年、ドイツ軍のポーランド侵攻をきっかけに第二次世界大戦が勃発する。ゾルゲはモスクワからの緊急指令として独ソ戦に関する日本軍の動向を探る任を受ける。ゾルゲと尾崎は、さまざまな情報ルートを用いて日本の対ソ戦回避を画策した。1941年9月、御前会議で日本軍の南進政策が決定。その知らせを受けたソ連軍はスターリングラードの戦いに兵力を集中させドイツ軍に圧勝する。任務を完遂して安堵していたゾルゲと尾崎だったが、翌月の10月にこれらの活動が発覚し、ゾルゲのグループは「国際諜報団事件」として日本人の検挙者は35名、うち18名が治安維持法、国防保安法、軍機保護法などの違反容疑で起訴された。

ゾルゲ事件は日本政府ばかりか、内外に大きな衝撃的を与えたが、日本警察当局はその事実に驚愕し、発表を半年以上遅らせた。

検挙者は獄死したり、取り調べ中の拷問で死んだりしたが、3年間の取調べと獄中生活の後、1944年11月7日、奇しくもロシア革命記念日に尾崎秀実とゾルゲは処刑された。

1964年、ゾルゲはソ連から「最高ソ連英雄勲章」を贈られた。英雄の称号を得るまで、ゾルゲ没後20年の時が必要とされた。1930年代当時、ソ連最高指導者スターリンはゾルゲを二重スパイではないかと疑い、ゾルゲが命がけで提供した情報も全面的に信用してはいなかったのである。

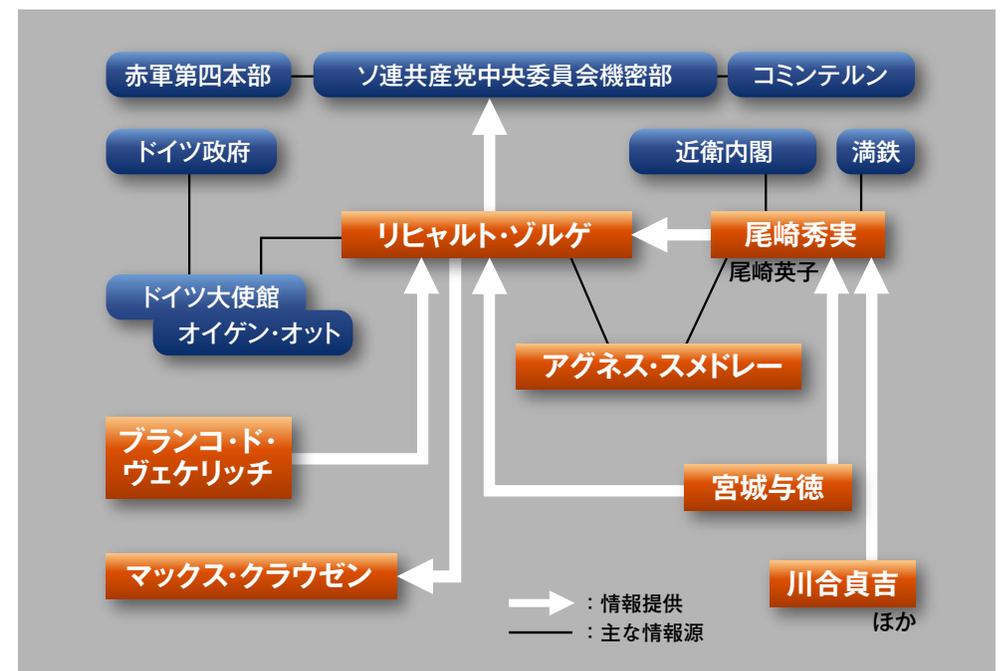
ゾルゲは、『日本における私の調査』と題した文章で次のように記している。「行った先々でその土地のことを知るの私の希望であり、楽しみであった。このことは日本および中国で特にそうであった。私はそうした視察を行うことを、単なる目的のための手段とは考えなかった。もし私が平和な社会状

態と、平和な政治的環境のもとに生きていたとしたら、多分私は学者になっていただろう。少なくとも諜報員になっていなかったことだけは確かである。」(『現代史資料1ゾルゲ事件1』みすず書房所収、『ゾルゲの見た日本』みすず書房再録)

一方、尾崎の行動は現在もいろいろな見方がある。また尾崎の後継者とされた人たちが冤罪だった可能性が極めて高いといわれている。

## ▶ゾルゲの生い立ち

ゾルゲは、1895年にロシア帝国の領土アゼルバイジャンの油田の町バクーで生まれた。ドイツ人の父とロシア人の母をもち、3歳で家族とともにドイツに移住。18歳の時、第一次世界大戦でドイツ志願兵として戦場に赴き、3度の負傷。3度目の負傷で除隊となるが、この時の後遺症で生涯片足が不自由になってしまった。1919年、ドイツ共産党に入党。国際共産世界の実現を夢見てコミニストになった。その後、ロシア共産党に移り、共産党の国際組織であるコミンテルンの一員となった。1929年にソ連赤軍第四本部に移り、1930年1月、ドイツの新聞記者の肩書きをもって上海へ。その目的は、中国国民政府と中国をめぐる資本主義列強の動向を調査するためだった。ここ上海でアメリカ人女性ジャーナリスト、アグネス・スモドレーを介して尾崎秀実と出会うことになる。



# ほつみ 尾崎秀実の人とその生涯

尾崎秀実は、1901（明治34）年に新聞記者尾崎秀真の次男として東京に生まれた。父秀真が台湾日日新報社に勤めを変えたことにより、単身赴任していた父のもとに、乳飲み子だった秀実は母とともに渡り、18歳まで植民地時代の台湾で過ごしている。台北第二小学、台北第一中学卒業後、志をもって東京に出て一高、そして東京帝国大学法学部政治学科を1925年に卒業した。

尾崎の学生時代は、第一次大戦後の大正デモクラシーの時期にあたり、社会主義思想がひろがり普通選挙運動が盛んな時期だった。学生たちのなかには、マルクス主義の影響を受ける者も少なくなかった。尾崎は、高等文官試験に合格して官吏になることを希望しており、その考え方はむしろ保守的だったが、大学卒業後大学院に1年間在学していた時期に、マルクス主義や社会科学の書物を熱心に読み、次第にマルクス主義に自らの思想が近づいていった。同時に中国に深い関心をもち、中国に関する知識も増やしていく。

1926年に東京朝日新聞社へ入社、社会部、学芸部から大阪朝日新聞社に異動となり（このころ結婚）、1928年に特派員として中国・上海支局に赴任する。

時あたかも革命運動渦巻く上海。当時の中国は資本主義列強の半植民地状態にあり、警察権も行政権も外国人がにぎり、租界と呼ばれる外国人居留地が幅をきかせ、中国人民衆の生活は悲惨そのものであり、かつ彼らの憎しみは日本に向けられ「排日・排日貸」をスローガンに反帝・反戦の運動が繰り返されていた。

尾崎は、日本の中国に対する軍事的な政策を非難し、中国を解放しようとする革命運動家たちに共鳴するようになっていく。そしてはじめは極めて初歩的な左翼グループに入っていく、魯迅とも知り合い、魯迅の作品集の日本語訳も手がけた。そして、ある人物に「非常に変わった女の新聞記者がいる」と紹介されて中国革命に深い共感を寄せるアグネス・スミスと出会い、意気投合するようになる。後年、尾崎は彼女の自伝小説『女一人大地を行く』を「白川次郎」のペンネームで翻訳出版した。

1930年秋、この上海でスミスが「アメリカの新聞記者ジョンソン」として紹介したのが、リヒャルト・ゾルゲだった。そして、尾崎、スミス、ゾルゲ、この三者が一堂に会した席で、尾崎はゾルゲの魅力に魅きつけられてしまう。ゾルゲは尾崎に対し、中国の国内問題と日本の中国政策に関する情報の提供を依頼、尾崎は請け負った。その後、日本軍が満州事変を引き起こしたところにゾルゲが尾崎に求めたのは、日本軍のシベリア侵入準備工作についての情報だった。尾崎は考え抜いた末に協力を決意、満州に派遣した川合貞吉の情報をもとにゾルゲに伝える。彼らの協力関



『大きく眼を開いてこの時代を見よ』  
（遺書のつもりで1944年7月26日に弁護士に宛てた手紙より）



係は、1932年2月の朝日新聞社の命による帰国まで続いた。

帰国後、尾崎は大阪朝日新聞社に勤務、この2年ほどの期間は彼の生涯のなかでは人並みの家庭生活を送った平静な状態だったといえる。が、国内外のファシズムという嵐が吹くようになると、時代が尾崎の心をゆさぶる。第二次世界大戦は不可避であると推測しつつも、何とか日本を救いたいと——。1934年、アメリカ帰りの沖縄人画家で、コミンテルンの指令を受けた宮城与徳が出現し、来日したゾルゲとも再会。今度は日本において日本の情報を提供するという使命を請ける。幸いにも尾崎は東京の朝日新聞社に転勤になり、ゾルゲとの会合も密になる。

1936年、太平洋問題調査会ヨセミ会議に列席したが、ここで終生の親友となる西園寺公一と知り合う（後に尾崎の原告裁判時の弁護士費用を援助した。多磨霊園にある尾崎の墓標の文字は西園寺による）。1937年4月には昭和研究会に参加。この研究会は、国策研究団体で近衛文磨らが積極的な援助をしていた。やがて総合雑誌に中国関連の論文を発表するようになり、尾崎は一躍中国問題評論家として世間の注目を集めるようになるが、朝日新聞社を辞めた1938年には近衛内閣、1940年には第二次近衛内閣の嘱託として政府の中枢で国策立案に関与した。近衛内閣側近たちは、中国での戦争の速やかな終結、東アジアを統率するための日本の新体制構築が必要と考え、尾崎にその立案を委ねた。

1939年から41年まで南満州鉄道東京支社調査部嘱託となる。尾崎には、「愛国者」「売国奴」双方の評価がある。その言動をたどれば、彼が「東亜協同体」の構築を構想し、中国共産党、コミンテルンとある面で連携し、一面では利用しつつ、日本の革新勢力を集集しようとしていたことがわかる。尾崎は、社会主義を標榜する単純な共産主義者ではなく、民族主義をふまえた東アジア社会の連繫、「東亜協同体」の実現をめざしたジャーナリスト、行動的思想家であった。ゾルゲとの交流もそのような意図の下に進められたものと思われる。しかし、満鉄調査部、近衛内閣とつながりを持ち、日本の政治中枢にも入り込んで日中戦争の行方を「東亜協同体」実現に向け言動する尾崎は、体制内批判を行なう危険な人物として映った。彼を検挙した理由は、コミンテルンのスパイであるゾルゲを通じてソ連への利敵行為による治安維持法違反である。

1941年10月15日、尾崎は検挙され、1944年11月7日、死刑に処せられた。44歳であった。



▶ 獄中から英子夫人に送った書簡集『愛情はふる星のごとく』は戦後発刊され、ベストセラーになった。

## ゾルゲ事件関連用語小事典

### ●二・二六事件

1936(昭和11)年2月26日未明に起こった陸軍皇道派青年将校たちによるクーデター。陸軍省、参謀本部、首相官邸などを占領し、国家改造の断行を要請した。軍上層部は戒厳令をしいたが、功を奏さず、昭和天皇の命でようやく鎮圧に乗り出した。この事件の後、統制派の政治的発言力が強くなる。

### ●ノモンハン事件

1939(昭和14)年5月、当時緊張関係にあった日ソ関係だが、満州国とモンゴルの国境ノモンハンで日ソが紛争となる。日本軍はソ連軍に壊滅的打撃を受け4カ月で終結する。この事件で軍部の対ソ開戦論は後退する。

### ●治安維持法

1925(大正14)年公布。国体の変革、私有財産制度の否認を目的とする結社活動および個人的行動を取り締まる法律。主に共産主義運動抑圧が目的。1945(昭和20)年、占領軍の指令で廃止されたが、廃止までの検挙者は8万人を超えるという。

### ●国防保安法

1941(昭和16)年制定。国防上、外国に対し秘匿すべき外交、財政、その他重要な国務などの国家機密の漏洩を防ぐために制定。1945(昭和20)年に廃止。



1930年代の上海、共同租界附近

#### 関連人物 ミニミニ事典

#### ●尾崎英子（おきま、エリ）

元は秀実の兄秀波の妻だったが、離婚して弟の秀実と恋愛のすえに結婚。

#### ●オイゲン・オット（Eugen Ott）

駐日ドイツ大使館付陸軍武官から、後に駐日大使。ゾルゲを友人として、さらには私設の情報官として大使館に迎えた。

#### ●近衛文麿（このえふみまろ）

1937年6月から翌年1月と、1940年7月から翌年10月まで、二度にわたり内閣総理大臣を務める。第一次内閣では日中戦争の長期化を防げず退陣。第二次内閣時には大政翼賛会を創立、日独伊三国同盟を締結。さらに第三次内閣の組閣を着手したが、日米交渉に失敗、東条英機との対立などで退陣。戦後、戦犯指名を受け、自殺。

#### ●西園寺公一（さいおんじきんかず）

元内閣囑託。近衛文麿のブレインの一人として軍部台頭を懸念するも、ゾルゲ事件に連座、1942年3月に検挙され、1年半の刑（執行猶予2年）。戦後は1958年から70年まで中国に滞在、民間大使として日中友好に尽力。

#### ●伊藤律（いとうりつ）

共産党員。尾崎の知人。共産党再建運動で、満鉄に勤務中二度検挙され、ゾルゲ事件発覚の端緒になった情報を警察に提供したといわれているが、不明。

## ゾルゲと、その主な同志たち

### ▶リヒャルト・ゾルゲ（Richard Sorge）※3・8頁参照

1895～1944。上海および東京におけるソ連の諜報団のリーダー。コミンテルン情報書記局長からソ連共産党に入党。上海で諜報活動を始め、1933年、ドイツの新聞社の記者として来日。駐日ドイツ大使オイゲン・オットの信頼を得て、ドイツ大使館に出入りして41年まで日独の機密をソ連に送った。コードネーム“ラムゼイ”ほか。

### ▶尾崎秀実（おぎまほつみ）※4・8頁参照

1901～1944。諜報団の主要メンバー。上海でゾルゲと知り合い、帰国後、中国問題に詳しいところから近衛内閣で南満州鉄道調査部囑託となり、ゾルゲの諜報活動に協力。コードネーム“オットー”ほか。

### ▶宮城与徳（みやぎよとく）

1903～1943。アメリカ共産党員、諜報団の主要メンバー。沖縄生まれの画家。16歳で渡米、兄のいるロサンゼルスへ。絵の勉強を始めてカリフォルニア州立美術学校やサンディエゴ州立美術学校で学び、フランス革命に参加した画家ドーミエに心酔。また、ロシア文学に親しみ、同時にバクーニンやクロボトキンなどの影響を受け、アナキー思想に傾倒、28歳のとき、アメリカ共産党に入党。野坂参三らの勧めで30歳で帰国。ゾルゲと初対面、尾崎とも出会い、画家という職業を生かして全国を歩き、軍人の肖像画などの依頼を通して軍事・経済関係の情報を収集した。コードネーム“ジョー”。

### ▶川合貞吉（かわいさだきち）

諜報団の外郭メンバー。北京で尾崎、ス מדレーと会い、約2年間、華北・満州各地の情報を収集。1935年に帰国し、宮城とも会い、組織の一員となり、再び華北に渡り、北支情報を報告、日本では軍需工場の情報収集にも動いた。一方で右翼の一派にも潜入、軍人たちの動向も探った。尾崎に7日遅れて検挙され、懲役10年の刑を言い渡されたが、1945年、日本占領軍最高司令部の政治犯即時釈放の指令により出獄している。

### ▶マックス・クラウゼン（Max Clausen）

1899年生まれ。東京諜報団の無線技師。ゾルゲの情報をサイファー式暗号に変換し、自作の移動可能な高性能無線機でソ連に打電。コードネーム“インソップ”。

### ▶ブランコ・ド・ヴェケリッチ（Branko de Voukelitch）

1904～1945年。東京諜報団の主要メンバー。クロアチア人ジャーナリスト。パリの共産党組織からの指令で来日。アバス通信社通信補助員として、主にフランス、イギリス、アメリカの通信社などから情報を収集。コードネーム“インクル”ほか。

### ▶アグネス・ス מדレー（Agnes Smedley）

1892～1950。上海諜報団のメンバー。中国問題に精通、インド独立運動にも参加したアメリカ人ジャーナリスト。ゾルゲと尾崎を結びつけた。尾崎が死刑になったことを聞き、「オー・マイ・ハズバンド!」と泣いたという。アメリカからイギリスに亡命し、イギリスで死去。

東京・多磨霊園のゾルゲの墓所(17区1種21側16番)内に、「ゾルゲとその同志たち」と刻まれた墓誌碑があり、そこに11名の同志の名前と没年が刻まれている。そして、その裏面には宮城与徳の兄、与整の句が刻まれている。

リヒアルト・ゾルゲ	1944.11. 7	刑死(巣鴨)
河村好雄	1942.12.15	獄死(巣鴨)
宮城興徳	1943. 8. 2	獄死(巣鴨)
尾崎秀実	1944.11. 7	刑死(巣鴨)
ブランコ・ヴェケリッチ	1945. 1.13	獄死(網走)
北林とも	1945. 2. 9	釈放の2日後死
船越寿雄	1945. 2.27	獄死
水野 成	1945. 3.22	獄死(仙台)
田口右源太	1970. 4. 4	歿
九津見房子	1980. 7.15	歿
川合貞吉	1991. 7.31	歿

ふた昔 過ぎて花咲く わが与徳
多磨のはらから さぞや迎えん

宮城与整

※同じ多磨霊園(10区1種13側5番)に、尾崎秀実・英子の墓がある。



# 尾崎秀実とゾルゲ、その時代〈年表〉

尾崎秀実	リヒャルト・ゾルゲ	その他のゾルゲ諜報団の動向	国内と世界の動き
1895 (明治28)	● アゼルバイジャンのパクーに生まれる		1895 (明治28)
1898 (明治31)	● 一家でベルリンに移住		1898 (明治31)
1901 (明治34)			1901 (明治34)
1904 (明治37)			1904 (明治37)
1906 (明治39)			1906 (明治39)
1912 (明治45)			1912 (明治45)
1913 (大正2)	● 小学5年修了、台北第一中学に入学		1913 (大正2)
1914 (大正3)			1914 (大正3)
1917 (大正6)			1917 (大正6)
1919 (大正8)	● ドイツ志願兵として第一次世界大戦に従軍		1919 (大正8)
1921 (大正10)	● ドイツ共産党入党		1921 (大正10)
1922 (大正11)	● ドイツ共産党機関紙の編集に従事		1922 (大正11)
1923 (大正12)	● フランクフルト大学社会学部助手		1923 (大正12)
1924 (大正13)			1924 (大正13)
1925 (大正14)	● 高等文官国家試験を受けるも不合格		1925 (大正14)
1926 (大正15)	● ソビエト共産党入党、国際スパイ活動開始		1926 (大正15)
1927 (昭和2)	● 東京帝国大学法学部政治学科卒業、同大学大学院に入る		1927 (昭和2)
1928 (昭和3)	● 東京朝日新聞社に就職		1928 (昭和3)
1929 (昭和4)	● 大阪朝日新聞社へ転勤。広瀬英子と結婚		1929 (昭和4)
1930 (昭和5)	● 朝日新聞上海支局に赴任		1930 (昭和5)
1931 (昭和6)	● アグネス・スメドレーと知り合う		1931 (昭和6)
1932 (昭和7)	● 上海で諜報活動を開始	● クラウゼン、上海へ	1932 (昭和7)
1933 (昭和8)	● 1930 スメドレーの紹介でゾルゲと尾崎出会う		1933 (昭和8)
1934 (昭和9)	● 川合貞吉をゾルゲに紹介		1934 (昭和9)
1935 (昭和10)	● 大阪朝日本社へ転勤。北京に赴き、スメドレー、川合と会合	● ヴェケリッチ来日。宮城与徳 帰国	1935 (昭和10)
1936 (昭和11)	● 東京朝日新聞社東亜問題調査会へ転勤。スメドレー著・白川次郎訳として『女一人大地を行く』出版		1936 (昭和11)
1937 (昭和12)	● 1934 奈良公園で尾崎とゾルゲ再会(5月)	● クラウゼン来日	1937 (昭和12)
1938 (昭和13)	● 1936 二・二六事件。西安事件起きる	● オット、ドイツ駐日大使となる	1938 (昭和13)
1939 (昭和14)	● 太平洋問題調査会ヨセミテ会議に出席	● 満鉄での尾崎の助手、伊藤律 逮捕される	1939 (昭和14)
1940 (昭和15)	● 朝飯会(首相のブレーン) 発起人となる。『風に立つ支那』『国際関係から見た支那』出版		1940 (昭和15)
1941 (昭和16)	● 朝日新聞社退社、近衛内閣嘱託となる		1941 (昭和16)
1942 (昭和17)	● 南満州鉄道株式会社調査部嘱託。『現代支那論』出版		1942 (昭和17)
1943 (昭和18)	● 支那抗戦力測定会議(上海) 出席。満州国協和会大会出席。『支那社会経済論』出版		1943 (昭和18)
1944 (昭和19)	● 満州旅行(8月)		1944 (昭和19)
1945 (昭和20)	● 1941 10月 ゾルゲ諜報団一斉検挙される	● 宮城与徳 獄死	1945 (昭和20)
	● 1942 司法省、ゾルゲ事件を発表	● ヴェケリッチ獄死	
	● 1943 9月29日 死刑判決(第一審)		
	● 1944 4月5日大審院、上告棄却の判決。		
	● 1944 11月7日 死刑執行		

